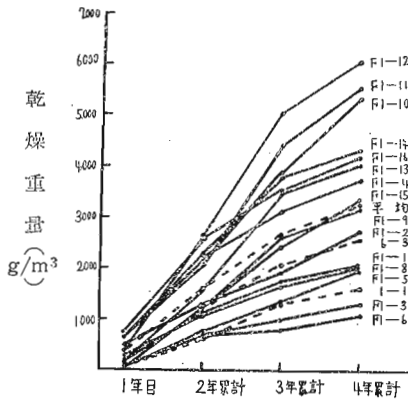
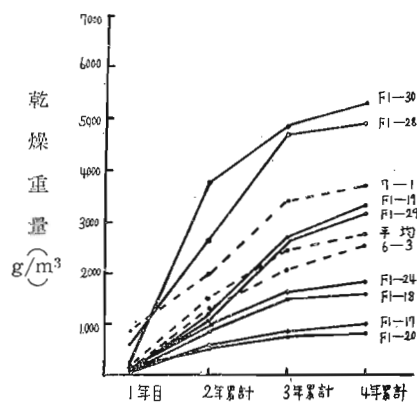


第3図 シイタケの交配系統別発生量
(1-1×6-3単胞子交配)



第4図 シイタケの交配系統別発生量
(6-3×7-1単胞子交配)



単胞子をとり、下記の組合せによって交配した培養菌糸を、コナラ原木10本ずつに植付け、上記1と同じ方法で実験した。交配の組合せは

- 組合せ { (1) 林試 1~1 × 林試 6~3
(2) 林試 6~3 × 林試 7~1

である。

実験結果は第3、4図に示す通りであつた。すなわ

ち、組合せ(1)における実験の平均値は、両親のいずれよりも大であり、組合せ(2)においては、両親の平均値よりも少い値を示した。この原因については、今後の研究にまたねばならない。

以上要するに、本実験の結果から、シイタケの品種改良の方法としては、選抜および交雑が相当期待できるのではないかと考える次第である。

51. スギザイノタマバエ (成虫) に対する BHC 剤の殺虫効果

林内に撒布された薬剤の残効性について

林試熊業支場 小田 久五・岩崎 厚

1. 試験実施個所

加久藤営林署白鳥経営区、7、8 林班内の15~20 年生スギ林 (被害発生林)。

2. 使用薬剤及び撒布方法

- (1) BHC 1%, 3% 粉剤
背負式動力撒粉機で反当 5~6 kg を樹幹に撒布。
- (2) キルモス (三共), サンクリーン (日農)
充分被煙ヶ所より試験材を採取。
- (3) リンデン石油剤, ディールドリン (油剤)
背負式煙霧機で単木的に樹幹撒布。

3. 撒布時期

5月15日、6月18日、7月21日、8月27日の4回で、撒布面積として、0.1 ha ~ 0.3 ha 位の面積を使用。

4. 残効試験月日

各撒布時期のものについて5月30日~6月2日、6月14日~20日、9月15日~10月2日の3回に実施。

5. 残効性の試験方法

(1) 5月15日の撒布林からは5月29日、6月18日のものは同日、7月21日のものは8月27日、8月27日のものは9月14日に、各撒布区毎に3本の立木を選び、それぞれの胸高部を30 cm の長さ1本切り取り、撒布区毎に計3本の供試材を採取し、これ等を林内に吊り下げ、それぞれの残効試験実施期間は室内に取り入れて、試験終了後は再び林内に設置した。残効試験実施ヶ所は加久藤署内白鳥保養所 (標高約800 m) の室内である。室内に置いたガラス円罫 (径7寸、高さ1尺2寸) に試験木を1本ずつ入れて洋紙で

蓋をし、蓋の一部の穴から成虫を円筒内に5頭づつ入れて、以後30分毎に円筒の底に落下反転する成虫を雌雄別に記録した。一試験単位として3本の供試材を使用したので、一試験単位として同時に3ヶの円筒を使用した。各試験毎に同一条件の対照区を設け、全期間を通じて総計88の試験区を設けた。

(2) 試験に用いた成虫の採取方法

木製の採取箱に成虫の発生が予定される被害木の樹皮を入れておき、発生した成虫を管瓶を用いて採取し、これを供試木を入れた円筒に移した。

6. 残効試験結果 (24時間経過後の結果)

- (1) BHC 1%, 3% 粉剤
1%では約2ヶ月、3%では約3ヶ月間略完全な残効性を有していた。
- (2) キルモス、サンクリーン等の燻煙剤は撤布後15日で殆んど残効性をみとめられなかつた。
- (3) リンデン(石油剤)、ディールドリン(油剤)等は煙霧機による撤布ではBHC粉剤に対し残効性は少く本試験では信頼できる結果はでなかつた。

52. ハゼ(伊吉)の黒痘病について(予報)

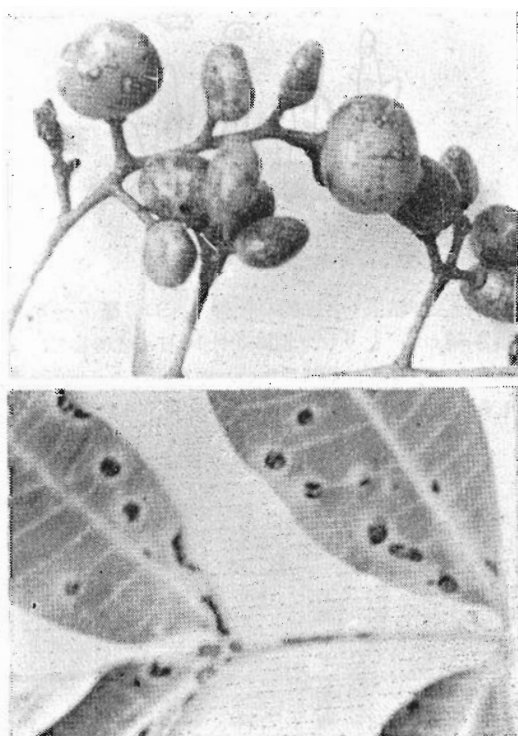
福岡県林業試験場 橋 本 平 一

我国の代表的なハゼ生産県である福岡県下において近年伊吉ハゼの葉、新梢、果実が黒褐色或いは蒼痂状の病斑に覆われ、特に果実が激害を受けて含蠟率が著しく低下する新病害が発生している。調査の結果伊吉ハゼを主に栽培している地方(5市5郡)はほとんど収穫皆無の状態である。筆者は1956年春以来本病について観察を続けてきたが、1957年5月病原菌を分離することに成功した。その結果 *Sphaceloma* 属の菌であることがわかった。従来ハゼの主要病害にはウドノコ病があるのみで、その他ウルシ科に数種の疾病が知られているが、この種の疾病についてはほとんど報告がなく、僅かに香月(1953)により、ヤマハゼ (*Rhus siluestris* Sieb et Zucc) に *Sphaceloma rhois* bi Tancourt et Jenkins が記載されているのみである。筆者は *S. rhois* の記載と本菌の形態を比較し、ヤマハゼに対する病原性についても検討した。その結果病原性を認めたが、形態に可成りの差が認められるので種名については更に充分な検討を要する。従つて現在のところ *Sphaceloma*, sp とし病名をハゼの黒痘病と呼び、ハゼの主要病害として取り上げ観察を続けている。現在までに得られた若干の結果について一応報告する。

病徴標徴及び伝染期間

最初4月下旬、5月上旬頃から新葉、萌芽葉茎、新梢に病斑が現われ、開花期である6月上旬頃より急激に病状が進展して主に幼果を侵し、7月上旬まで伝播を繰返す。その後は気温の上昇と寄主組織のククラ化のためか、病状の進展はほとんど認められない。

葉：病斑は散生または群生して最初褐色、表面に凸



型の不定形 0.5~2.5 mm の大きさで現われる。後にこの凸型は不明瞭となり、幼葉はその中央部が灰色となつて破れる。病斑が二つ以上融合すると不規則となり、葉脈、葉縁を侵された場合には奇型を呈する。

果柄、葉柄：病斑は黒褐色、紡垂形 0.5~5 x 0.5~2 mm の大きさで現われる。

果実：最初褐色の病斑が現われ、大きさは葉上のそれに等しく、後に光沢ある黒褐色の病斑となる。病斑